多田文男フィールドノートの記述内容

―第一次満蒙学術調査研究団を事例に―

松浦　誠

Ⅰ　はじめに

多田文男（1900～1978）は、日本を代表する地理学者である。地形学を専攻したほか、陸水学や人文地理学の分野でも数多くの論文を執筆し、地理学の応用にも力を注いだ（岡田2013：157）。1921（大正10）年に東京帝国大学理学部地理学科に入学し、1925（大正14）年に卒業した。東京帝国大学を卒業後は、同大学の助手を経て、1926（大正15）年、同大学助教授に任命された。また、同年からは地震研究所、1941（昭和16）年からは資源科学研究所の所員も兼任した。その後、1953（昭和28）年に東京大学教授に昇任し、1961（昭和36）年に同大学を退官した。駒澤大学の地理学教室でも、1939（昭和14）年から教鞭をとった。1966（昭和41）年からは駒澤大学文学部の専任教授となり、1978（昭和53）年に死去するまで、駒澤大学で勤めた（駒澤地理1978：263-271）。多田と駒澤大学の経緯から、禅文化歴史博物館には、多田が1923（大正12）年から1974（昭和49）年にかけて使用したフィールドノート99点が所蔵されている[1]。

多田のフィールドノートについては、小池（2007）が多田の各研究の要点と関連付けながら、記述内容について概要を論じた。フィールドノートは、研究者の現地調査における計画・観察内容・取材内容を記録した個人的なメモであり、他人の目に触れる機会はない。そのため、20世紀を代表する地理学者である多田のフィールドノートは、地理学史研究において重要な資料であるといえる。

多田文男フィールドノートの今後の活用を目的に、2017年10月９日～11月18日にかけて、禅文化歴史博物館において「第一次満蒙学術調査研究団～多田文男フィールドノートの記録から～」を開催した。本企画展では、多田の活動の中でも特に、第一次満蒙学術調査研究団に焦点を当てた。第一次満蒙学術調査研究団は、1933（昭和８）年７月から同年10月にかけて満州国の満蒙地域に派遣された、自然科学分野の研究者で構成された学術調査隊である。本企画展では、研究団と関係者の様相をフィールドノート、調査報告書、新聞報道の三つの視点から概要的に取り上げた。本稿では、第一次満蒙学術調査研究団の概要と多田文男フィールドノートの記述内容の紹介を行う。

写真１　見返し（1430-B-25 002）

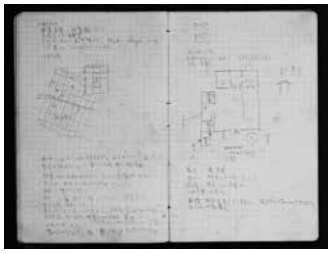

写真２　本文（1430-B-25 038）

Ⅱ　第一次満蒙学術調査研究団実施の背景

１．研究団派遣までの経緯

第一次満蒙学術調査研究団の調査報告書全26冊の第一部『第一次滿蒙學術調査研究團ノ自然科學調査』の冒頭に、派遣に至る経緯に関する記述がある。これによると、満洲国における「科学的研究の不足」への関心を持っていた陸軍政務次官子爵土岐章[2]の熱心な斡旋により、第一次満蒙学術調査研究団の結成に結びついたと記されている（徳永1935：

1-2)。ただし、第一次満蒙学術調査研究団派遣には、計画の段階で日本陸軍及び関東軍、外務省文化事業部が密接にかかわっていた。

第一次満蒙学術調査研究団に関する資料に、アジア歴史資料センターが公開している『自昭和七年至十年満蒙学術調査研究団ノ調査事業助成一件』がある。資料冒頭の関東軍参謀長から陸軍次官宛に発せられた昭和７年８月23日付の参同文によると、研究団派遣は、1932年には立案され、すでに関東軍の賛同を得ていたことがわかる。ただし、この時点では、安全上の問題から派遣時期に就いては未定であった。その後、調査団派遣計画案は、数回改定が行われた。以下では、計画案の改定過程から、第一次満蒙学術調査研究団実施の背景を確認する。

（1）昭和７年９月28日付「満蒙学術調査研究視察団派遣に関する方案　参謀本部七班」

昭和７年９月28日「満蒙学術調査研究視察団派遣に関する方案　参謀本部七班」（以下、昭和７年９月案）は、参謀本部七班によって作成された。表紙には、土岐政務次官案と記されている。研究団派遣の目的は「満蒙奥地に於る実状を踏査し満蒙研究の精覈なる資料を探究し以て満蒙開発に資す」とある。班編成や各班の調査地、調査期間がすでに定められており、参謀本部が定めた行程で研究を行うよう計画されていた。一方、派遣形式は、研究団と満州国の二者の契約により実施されるものとし、調査団の人選も参謀本部は関与せず、調査団の補助として関わると記されている。派遣する研究者は、農業政策、林業政策、植物学、鉱業政策、地質学、考古学、東洋史学、畜産政策、人類言語学の９分野を想定していた。地理学は､軍部関係の随行者として各班に測量師と将校もしくは測量士助手の同行が計画されていた。また、各班に新聞記者３人を同行させることになっていた。

（2）昭和８年４月19日付「第一次満蒙学術調査研究視察団派遣要領（案）」

昭和８年４月19日「第一次満蒙学術調査研究視察団派遣要領（案）」（以下、昭和８年４月19日案）では、派遣目的・形式が変更された。派遣目的は「満蒙奥地における文化的実情を踏査し満蒙研究の資料を探究し以て満蒙開発に資すると共に世界文化研究に貢献せんとするに在り」となり、満蒙地域の開発だけでなく学術分野における貢献も含んだものになった。派遣形式も、満州国から団長個人への委嘱となり、調査団に対して関東軍が指揮権を持つことが明記されるようになった。

研究団の編成や調査内容も変更された。昭和８年４月19日案では、研究団は３班編成となり、各班に写真や測量、警戒、通訳等の人員、３班全体で１名の関東軍特務部将校が随行する計画となった。研究者の専攻については、昭和７年９月案から「政策」の表現が削除され、自然科学分野の基礎研究を想定した分野が明記されるようになった。さらに、新たに「人類人文地理」の調査を行う班が追加された。また、昭和８年４月19日案での調査経路は、奉天～赤峰～熱河～凌源～阜新道という行程が計画され、３班全てが同一の行程で行動する計画だった。

（3）昭和８年４月20日付「第一次満蒙学術調査研究団派遣要領（案）」

昭和８年４月20日「第一次満蒙学術調査研究団派遣要領（案）」（以下、昭和８年４月20日案）では、随行する将校が研究団に対し命令権を有する旨と、研究団参加者の人選及び採否は別途協議をする旨が加筆された。また、陸軍と関東軍、外務省が調査団派遣に対し、必要な援助を行うと記されている。このうち、陸軍省から関東軍司令部へ依頼した援助事項は、「満洲國政府に交渉の件」「特務部将校、在満在郷軍人、通訳選定の件」「軽機関銃、小銃其他必要なる材料貸与方の件」「自動貨車、馬車、駄馬等所要の移動機関援助の件（視察団自ら雇用のこと）」「宿泊給養等に関し便宜付与の件」であった。満州国関係者との事前交渉や人員、備品の確保に関して、陸軍及び関東軍が主導で行っていたことがうかがえる。なお、『自昭和七年至十年満蒙学術調査研究団ノ調査事業助成一件』内の他の文書や、報告書の記述から、第一次満蒙学術調査研究団は、昭和８年４月20日案に則って実施されたと思われる。

２．研究団の予算

『自昭和七年至十年満蒙学術調査研究団ノ調査事業助成一件』収録の『満蒙学術調査研究団収支決算報告書（昭和八年十二月末日現在）』によると、満蒙学術調査研究団は、総額100,451円２銭の予算のもとに実施された。この予算は、諸

団体からの助成金や寄付金により賄われた。内訳は、外務省助成金50,000円、日本学術振興会寄付金15,000円、原田積善会寄付金10,000円、南満州鉄道株式会社寄付金10,000円、朝日新聞社寄付金10,000円、朝日新聞社から記者二名の旅費5,000円、雑収（銀行利子及雑収）451円２銭であった。外務省からの助成金は、対支文化事業予算[3]から支給されていた。また、朝日新聞社は、報道機関で唯一の出資者であった。第一次満蒙学術調査研究団に関する報道権を朝日新聞社が独占していた点や、記者の派遣の他にも社有飛行機を貸与した点からも、1933年の時点ですでに、朝日新聞社と陸軍との間に特別な関係があったことがうかがえる。

Ⅲ　満蒙学術調査研究団の参加者と行程

１．参加者

Ⅱ章で述べたように、満蒙学術調査研究団は、主に自然科学に関する調査を行った。専攻は、地質学、古生物学、岩石学、鉱床学、地理学、植物学、動物学、人類学であり、帝国学士院長桜井錠二によって研究者が選定された（以下、徳永1934：１-２）。表１の研究者一覧を見ると、地質学及び古生物学は、団長の徳永重康[4]をはじめ、清水三郎[5]や松澤勲[6]、地質学及び岩石学・鉱床学は伊原敬之助[7]、佐藤捨三[8]、小南不二男[9]が担当した。以上６名の研究者は地学班として調査を行った。また、植物学は、中井猛之進[10]や、本田正次[11]、北川政夫[12]が担当した。また、動物学は森為三[13]と岸田久吉[14]が、地理学は多田文男、人類学は八幡一郎[15]が担当した[16]。

表１　参加研究者

分野	氏名	参加当時の所属
地質学 古生物学	徳永重康（団長） 清水三郎 松澤勲	早稲田大学教授、東京大学講師、理学博士、工学博士 上海自然科学研究所主任研究員、理学博士 東京帝国大学理学部助手、理学士
地質学 岩石学 鉱床学	伊原敬之助 佐藤捨三 小南不二男（庶務）	地質調査所[17]技師、理学士 上海自然科学研究所[18]研究員、理学士 早稲田大学工学士
地理学	多田文男	東京帝国大学助教授、理学士
植物学	中井猛之進 本田正次 北川政夫	東京帝国大学教授、小石川植物園園長、理学博士 東京帝国大学理学部助手、理学士 東京大学植物学教室理学士
動物学	森為三 岸田久吉	京城帝国大学予科教授 農林省嘱託
人類学	八幡一郎	東京帝国大学嘱託

（『第一次満蒙学術調査研究団　第１部』より作成）

研究団には、調査者以外の人員も参加した（表２）。研究助手として、高橋基生[19]と尼ヶ崎清太郎が参加した。庶務会計は、小南が兼任したほか、山本武と滝野彦一郎も担当した。また、当時の満州国の情勢を鑑み、研究団の警備として村岡亀吉予備陸軍歩兵少佐と宮田哲特務曹長、軍曹以下一等兵30名が同行した。大阪朝日新聞社からは藤木九三が通信担当として、東京朝日新聞社からは島田謹介が撮影担当として参加した。調査団の活動は、朝日新聞の朝刊、夕刊において頻繁に報道された。なお、津留、村岡、山本、藤木、島田は、研究者と同様に満州国政府から公式に委託されたうえでの参加であった（徳永1934：３）。

表２　研究者以外の参加者

役職	人数	氏名
助手	2	高橋基生、尼ヶ崎清太郎
庶務会計	3	小南不二男（兼任）、山本　武、瀧野彦一郎
警備隊員	32	村岡亀吉郎（予備陸軍歩兵少佐）、宮田哲（特務曹長） 【軍曹以下一等兵】 原寅吉、田中健太郎、中山優一、河合和雄、飯野宗吉、浅田秀一、山崎雄太郎、高畑博、田母神誠壽、新村政雄、長嶋運平、高遠辰郎、阪本幸治、信廣順次郎、長谷川宇一郎、米原猛、石川伊佐雄、福島常七、佐野祐三、原田忠、坂部一良、飯野圭一、富田直木、高野卯作、原田俊一、小池金之助、白井弥三郎、志田政男、小野豊、飯島正吉
通訳	7	北野一兄、岡崎敏雄、柿本盛和、前田実美、張文富、紀殿元、劉述文
通信	1	藤木九三（大阪朝日新聞）
撮影	1	島田謹介（東京朝日新聞）
料理人	1	柿木盛和
常雇運転手	2	横井義男、村田茂一郎

（『第一次満蒙学術調査研究団　第１部』より作成）

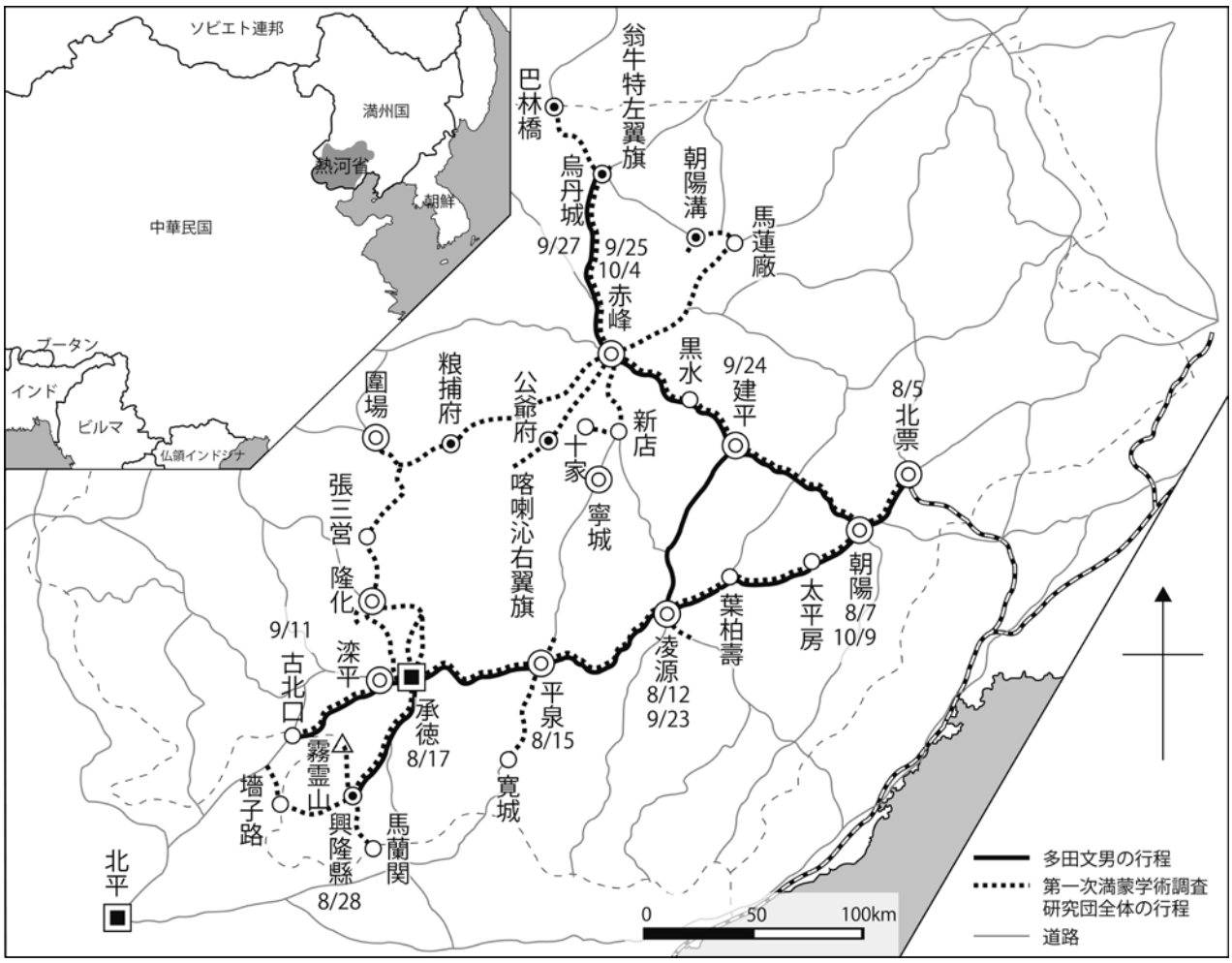

図１　満蒙学術調査研究団の行程
（『第一次満蒙学術調査研究団　第一部』、多田文男フィールドノートより作成）
※日付は、当該地への多田の到着日を示す。

また、調査地での便宜を図るため、外務省や熱河省から人員が派遣された。外務省からは満洲國内の領事館職員３名が派遣された。北票・承徳間は奉天領事館員岩田冷鐵、承徳興隆縣間は承徳領事館員中根直介、赤峰附近は赤峰領事館員牟田哲二が同行した。熱河省からは、熱河省公署実業庁祖光勲が承徳附近の鉱産地調査に同行し、同庁王保粹が赤峰烏丹城方面の調査に同行した（徳永1934：２-３）。

２．調査行程

『満蒙学術調査研究団報告　第１篇』には、昭和８（1933）年８月５日～10月10日にかけての調査行程の概要が記されている（以下、徳永1934:10-23）。参加研究者は、７月23日に東京駅を出発し、翌24日に神戸から門司まで航路で移動し、25日に門司から出港し７月27日の朝大連へ到着した。往路の様子は、朝日新聞で連日報道されていた。大連到着後は、満州国政府関係者と会談を行い、招宴にあずかった。８月２日に結団式を行い、同日夜に新京を出発し、８月４日に北票に到着した。８月４日には満洲国に在留していた団員も合流し、翌日から調査を開始した。８月５日～８月23日は、北票、朝陽、凌源、承徳を拠点に調査を行った。各都市の滞在期間は２～５日間ほどであった。

８月24日以降は、徳永が率いる徳永班と中井が率いる中井班に分かれて調査を行った。徳永班は清水、松澤、小南ら地質学・岩石学・鉱床学の研究者で構成された。中井班は、伊原、岸田、森、佐藤、多田、本田、八幡、北川であり、地学・地理学・人類学・動植物学班の研究者で構成された。また、中井班には、医学士・津留や朝日新聞記者・藤木、カメラマン・島田も帯同した。

徳永班は、９月９日まで承徳・隆化間で調査を行った。その後、９月11日～20日にかけて、北平（北京）の地質調査所や大学、動植物園、博物館を訪問した。この間、小南は単独行動をとり、９月７日～13日にかけて承徳から平泉、寛城を経て寛城東方の缸窰溝炭坑を調査した後、承徳へと帰還している。また、松澤と佐藤も別行動をとり、９月12日～17日にかけて古北口～承徳間の地質調査を行った。

中井班は、８月24日～９月22日にかけて北営房や興隆縣などの調査を行った。８月28日～９月11日の間、霧霊山動植物班と地学・地理学・人類学班とに分かれて行動した。この間、動物班は霧霊山へ登頂したほか、霧霊山周辺で動植物の収集を行った。また、地学・地理学・人類学班は、興隆縣周辺の丘陵地や金鉱、集落で調査を行い、９月11日に古北口で中井班本隊と合流した。

９月23日からは、隆化や圍場を調査しつつ赤峰へ向かう徳永班と、凌源・朝陽経由で赤峰に向い調査を行う中井班とに分かれ、10月10日の調査終了まで活動した。調査日程終了後は、10月11日に朝陽から奉天まで汽車を利用して移動し、17時45分に到着した。10月12日には新京に到着し、新京神社への参拝や関東軍菱刈司令官及び鄭満州国総理への報告を行った。その後、18日に大連を出港し、21日に門司港へ帰航し、23日に東京へ帰着した。なお、帰路の様子も往路同様に朝日新聞朝刊で連日報道された。

３．主な調査内容

第一次満蒙学術研究団による調査は、各地域の中核都市を拠点として、周辺の集落や丘陵地、山地、河川等を回る形で行なわれた。各地域の滞在期間は最長でも８日程度であり、都市間の移動の際に調査を行う場合もあった。

具体的な調査内容について報告書中の記述をもとにみる。徳永団長が班長を務める地学班は、炭坑・金鉱・鉱山などでの鉱物資源の調査や化石の発掘を行った（以下、徳永1934：10-23）。人類学班は主に遺跡や丘陵地で表出した石器・土器の採集を行った。本格的な発掘を行わなかった要因としては、人手に限りがあったことや満蒙地域を面的に調査する研究団の調査方針のほかに、東亜考古学会の調査団が同時期同地域で発掘を行っていたことが挙げられる。動物学・植物学班は、水草や魚類、昆虫類、鳥類等の動植物の採集を行った。採集した動植物は現地で剥製にしたうえで本国に送られ、専門の研究者によって報告書が作成された。

地理学班の調査は、報告の内容から、地形や家屋形態等、多岐にわたっていた。しかし、行程中の多田の行動につい

て報告書中の調査行程では、地理学班単独での記述は少なく、朝日新聞の記事にも取り上げられていない。そのため、多田文男の使用したフィールドノートから当時の行動を取り上げる。

Ⅳ　多田文男フィールドノートの記述内容

１．フィールドノート記述内容の傾向

第一次満蒙学術調査研究団で使用したフィールドノートは、1430-B-25（1933年６月１日～９月３日）、1430-B-26（1933年９月５日～10月５日）、1430-B-87（1933年10月７日～12月16日）の３冊である。これらのフィールドノートの記述内容を１．調査内容（文）、２．調査内容（図表）、３．日記、４．メモ、５．未記入、６．その他の６項目に分類し傾向をみた。

最も多い項目は、調査内容（文）（91件）であり、調査内容（図表）（78件）と合わせると、調査内容に関する記述が全体の70％以上を占めている。具体的な内容をみると、地形観察だけでなく、家屋や集落形態の調査、警務局で閲覧した人口や商業等の統計などが記載されていた。日記（47件）は全体の17％ほどであり、断続的に日記をつけていたことがうかがえる。内容は、その日の調査地名や行程、調査内容を記している場合が多く、多田の感想や他の研究者との交流の様子も一部記述されていた。メモ（11件）は、出発前に記した満州国に関する先行研究の引用や持ち物、日程、調査終了後の講演会でのメモなどが見受けられた。以上のように、第一次満蒙学術調査研究団参加時の多田のフィールドノートは、日々の行程や調査内容について報告書に記載された内容を補完することができるものであった。その一方で、多田の学術的な興味関心の在り処や調査時以外の多田の心情を読み取ることができる資料でもあるといえる。

２．記述に見る研究団の様子

（１）調査における多田の着眼点

以下では、多田文男フィールドノートのうち、多田の感想や他者との交流に関する記述を取り上げる。満蒙学術調査研究団における多田の活動のひとつに、1933年８月20日の飛行機による興隆縣五龍山の登山ルート判読がある。この日の日記には、「午前九時飯沼飛行士ノ操ジュースル朝日飛行機ニノリテ承徳出発寧平ニ出デソレヨリ地平街道ニ沿ウテ古北口ニ達ス」（1430-B-25 039）と飛行ルートが記されている。また、判読の際、多田は五龍山のほかに万里の長城も観察していた。同日の日記において、山地における万里の長城の構造的特徴について述べ「五龍山ハ余リ高キガ故ニココノ壁ヲ造ラズ」（1430-B-25 039）との所見を述べている。多田文男フィールドノートには、地形観察だけでなく地形と人々の活動との関係について記述されている場合が多い。多田が人文科学と自然科学の両方の視点から調査地を捉えていたことがうかがえる。

（２）満州国行政・軍事関係者等からの歓待

第一次満蒙学術調査研究団は、満洲國内で有力者から歓待を受る機会が多々あった。『第一次満蒙学術調査研究団ノ自然科學調査』には、王府役人等の招宴についての記述がある（徳永1934：10-22）。多田文男フィールドノートでも言及されており、報告書の記載以上に幅広い立場の関係者から頻繁に歓待を受けていた様子が窺える。

歓待に関する多田の記述について一部を取り上げる。1933年８月29日、多田は降雨のために興隆縣司令部で島村大隊長に興隆縣の状況について聞き取り調査を行った。その後、同日夜に島村大隊長の招待を受けている（1940-B-25 056）。翌日の日記にも、「夜ハ歓承リ」（1940-B-25 056）と記述されている。30日の調査も興隆縣政務所や商務会での聞き取り調査や資料収集を行っていた。また、９月22日正午には、承徳において領事館・省公署実業局の主催で満蒙学術調査研究団の歓迎会が行われた。この歓迎会には領事代理や警察署長、実業局長が出席したほか、芸子による歓待も受けたようである（1430-B-26 024）。

多田は、満蒙学術調査研究団において、地形学以外にも人文地理学分野に関する調査も行っていた。その調査内容の関係上、他の研究者に比べて行政府を訪れる機会も多かった。多田の調査による交流や第一次満蒙学術調査研究団の政治的背景も合わせて、徳永・中井両氏による二班体制になった後も頻繁に歓待を受けていたと思われる。

（3）他分野研究者との交流

第一次満蒙学術調査研究団は、研究者の構成と短期間・班単位で調査を行うという行程の特徴から、異なる分野の研究者と合同で調査を行う機会が多かったと思われる。多田文男フィールドノートにも、その事実をうかがうことができる記述が見受けられる。

第一次満蒙学術調査研究団において、多田は中井班として行動していた。そして、中井班の中で多田が行動を共にする機会が多かった研究者は、人類学者の八幡である。フィールドノートにも、多田と八幡が共に行動していたことを示す内容が記述されている。８月９日の日記には「ソレヨリ二族営子ニ出デコノ辺リノ石器ヲ掘リ川ヲ渡ツテ帰朝」（1430-B-25 019）と記されている。八幡の調査は、報告書によると地表に散在した石器や土器の採集が主であった（徳永1934：10-23）。そのため、フィールドノートの記述から、多田は八幡の調査の補助も行なっていたことが窺える。８月10日（1430-B-25 025）や９月30日（1430-B-26 45）の日記の中にも石器を拾った旨が記されており、多田と八幡が共に調査を行う頻度は少なくなかったことが窺える。なお、多田以外の中井班として行動した動植物学者達も、自身の調査の合間に土器や石器の収集を行っていたようであり、その様子は1933年10月27日の朝日新聞朝刊でも取り上げられている。限られた人員で網羅的に調査を行なっていたことから、自身の専攻する分野でなくても協力して調査にあたっていたと考えられる。

また、８月28日の日記には「北営房を出発、伊原、佐藤両氏はこの附近の炭坑調査の為一日残る事となる。□日興隆縣で会って酒をのむ事を約してたもとを分かつ」（1430B25_050）と記されている。伊原と佐藤の両氏は、岩石学・地質学・鉱床学を専攻する研究者である。８月24日から９月22日にかけて徳永班・中井班に分かれて行動した際は、中井班に所属していた。多田と伊原、佐藤は、それぞれの専攻から、互いの研究に少なからぬ関心があったと思われる。特に伊原は、多田と同時期に東京大学に勤めていたため、以前から以前から交流があったと思われる。

Ⅴ　まとめ

本稿では、多田文男フィールドノートのうち、第一次満蒙学術調査研究団で使用した３冊について、記述内容の確認を行った。その結果、調査内容以外にも、現地の人々や他の研究者との交流など、調査結果をまとめた報告書や論文には書かれていない、多田の人間関係を読み取ることができる貴重な資料であることが確認できた。禅文化歴史博物館には、1923年から1972年にかけて記入された多田のフィールドノートが収蔵されているため、各時代における多田の人間関係や研究の背景を追うことが出来ると考えられる。多田文男フィールドノートの活用は、今後の課題であると言える。

（まつうら　まこと　駒澤大学大学院人文科学研究科地理学専攻博士後期課程）

注

（1）多田文男フィールドノートは、2004年６月１日から７月30日にかけて、駒澤大学地理学科・歴史学科創立75周年記念事業として行われた禅文化歴史博物館の企画展「地歴のあゆみとその世界」の折りに公開され、その後、多田の令夫人のご厚意により寄贈された。

（2）土岐章（1892～1979）：大正７年に襲爵、昭和３年に貴族院に当選した。昭和６年犬養内閣成立に際し陸軍参与官に就任し、昭和７年の斎藤内閣では陸軍政務次官に任命された。昭和９年の岡田内閣でも同職に留任し、昭和10年12月に退官した。（人事興信所編1941：ト18）

（3）対支文化事業予算とは、盧溝橋事件の団匪賠償金や山東関係の鉄道、青島公有財産及製塩業補償等支那国庫証券の元利並びに山東関係鉱山の保証金をもととする予算である。当時外務省文化事業部が管掌していたもので、支那・満洲國に対する教育・研究活動と関連施設の設置・運営の補助に充てられていた。同時期に活動していた東亜考古学会も対支文化事業予算を基に設立された。

（4）徳永重康（1874～1940）：明治期から昭和戦前期にかけての地質学者・古生物学者である（徳永1985）。1894年、東京帝国大学理学科大学動物学科へ入学した。『東京帝国大学一覧』（1894）には、旧姓の「吉原重康」で記載されている（東京帝国大

学1894：350)。在学中に古生物に興味を持ち、地質学科の講義を聴講していた（徳永1985)。1897年、同大学を卒業後、大学院に進学し、古生物学を専攻した（東京帝国大学1897：342, 598)。1907年、東京工科学校の校長となる。1910年からは早稲田大学理学部設置と共に教授へ任用され、1940年に死去するまで務めた（徳永1985)。

（5）清水三郎（？～1939)：大正期から昭和戦前期にかけて活躍した古生物学者である。1923年から1926年にかけて、東北帝国大学理学部地質学古生物学教室で副手を務めた（東北帝国大学1923：46)。その間、ハルピン軍政部の嘱託として、樺太地域の地質調査を行った（薩哈嗹軍政部1925)。また、1925年には、同教室の講師となり（東北帝国大学1926：50)、1930年３月まで務めた（東北帝国大学1929：52)。その後、1931年４月から1938年３月にかけて、上海自然科学研究所に勤めた（上海自然科学研究所1942：193)。

（6）松澤勲（1906～1990)：大正期から戦後にかけて活躍した地質学者であり、地殻構造について研究を行った（以下、水谷1990)。1931年３月、東京帝国大学理学部地質学科を卒業し、同年９月同大学理学部副手となった。第一次満蒙学術調査研究団終了後は、1934年11月、同大学理学部助手に任ぜられ、1937年８月からは地質調査所に勤務した。また、1949年から1969年にかけて、名古屋帝国大学理学部地球科学科教授として務めた。

（7）伊原敬之助：1907年、東京帝国大学理学部地質鉱物学科に入学し（東京帝国大学1907：90)、1910年７月に卒業した（東京帝国大学1911：208)。その後、第四高等学校に着任（小西2009：５－６)、1915年まで務めた（第四高等学校1915：73)。その後、1919年には農商務省地質調査所に所属していたようである（地質調査所1919：１)。

（8）佐藤捨三：1930年３月、東京帝国大学理学部地質学科を卒業（東京帝国大学1930：556）した。同年、同大学大学院へ進学し、岩石学を専攻した（東京帝国大学1930：459)。1932年１月、上海自然科学研究所研究員に就任した。1940年３月に同研究所を退職し（上海自然科学研究所1942：194)、華中鉱業へ移動となった（日本地学史編纂委員会2001：382)。

（9）小南不二男：大正７年、早稲田大学大学部理工科採鉱冶金学科を卒業した（早稲田大学1936：366)。満蒙学術調査研究団以前の業績には小南（1933）がある。小南（1933）執筆当時は、常磐石炭販売株式会社に勤めていたようである（小南1933：10)。

（10）中井猛之進（1882～1952)：大正期から昭和戦前期にかけて活躍した植物学者であり、植物分類学を専攻した（大場2007：364-366)。1904年、東京帝国大学理科大学植物学科に入学し（東京帝国大学1904：67)、1907年に卒業した（東京帝国大学1907：82)。卒業後は、同大学植物学科助手、植物学教室を経て、1922年７月、同大学理学部植物学教室助教授に任命された（小倉1940：259-269)。昭和２年６月には、同教室教授となり（小倉1940：280)、昭和５年10月からは東京帝国大学理学部付属植物園園長を兼任した（小倉1940：286-287)。

（11）本田正次1897～1984)：植物分類学を専攻した植物学者である（大場2007：453)。大正７年、東京帝国大学理科大学に入学、卒業後は、大正10年５月に東京帝国大学理学部植物学教室の助手となった（小倉1940：260-267)。昭和６年以降、昭和女子薬学専門学校や東京女子高等師範学校、千葉高等園芸学校などで講師をした（大場2007：453)。第一次満蒙学術調査研究団後は、1934年に東京帝国大学理学部助教授、1942年に同大学教授となり、附属植物園園長の兼任した（大場2007：453)。

（12）北川政夫（1910～1995)：植物分類学を専攻した植物学者である（大場2007：179)。1930年４月、東京帝国大学理学部植物学科に入学し、昭和８年３月に卒業、同年４月、同大学大学院に進学した（小倉1940：287-293)。第一次満蒙学術調査研究団後は、1935年から1945年にかけて満州・大陸科学院研究官、同中央植物館学会官を務めた（大場2007：179)。

（13）森為三（1884～1962)：大正期から戦後にかけての動物学・植物学者であり、主に朝鮮半島の動植物の研究を行った（以下、上田1963：116-119)。1904年３月、東京帝国大学付設第一臨時教員養成所博物学科を卒業した。佐賀県立鹿島中学校教諭、京城高等普通学校教諭などを経て、1925年に京城帝国大学予科教授に就任、終戦まで務めた。

（14）岸田久吉（1888～1968)：大正期から昭和戦後にかけて活躍した動物学者であり、ほ乳動物から節足動物まで幅広い分野の研究を行った（河田1968：177)。1918年、東京帝国大学理学部動物学科選科に入学し（東京帝国大学1921：59)、1921年に卒業した（河田1968：177)。同大学卒業後、農商務省農事試験場の嘱託、1922年からは農商務省鳥獣調査室の嘱託も兼任した（河田1968：177)。

（15）八幡一郎（1902～1982)：1921年、長野県立諏訪中学校を卒業した（日本歴史学会1999：338)。中学校在時にはすでに、鳥居龍蔵の諏訪地方の考古学的調査に参加していた（八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編集委員会1985：767)。1921年４月、東京帝国大学理学部人類学科選科に入学し、1924年に卒業した。同年12月、東京帝国大学理学部副手となり、1931年には同

大学理学部助手に任命された（日本歴史学会1999：338）。

（16）研究者の参加当時の所属や経歴から、一部を除き、東京帝国大学出身者によって構成されていたことがわかる。

（17）地質調査所は、ドイツ人研究者のナウマンの提唱により、農商務省直轄の地質調査機関として、明治15年２月に設置された（地質調査所百年史編集委員会1982：１-14）。設立当初は、20万分の１全国地質図幅調査事業を中心とした活動を行っていた（地質調査所百年史編集委員会1982：19-26）。以降、時代に即した調査研究がなされ、昭和８年ごろは、７万５千分の１地質図幅調査や炭田・炭鉱調査等の国内調査のほか、軍などの依頼による海外の油田、鉄鉱の調査も行われていた（地質調査所百年史編集委員会1982：47）。

（18）上海自然科学研究所は、義和団事件の賠償金を基とする東方文化事業の一環として、1931年４月に設置された（山根2005：64-104）。研究所設置にあたっては、自然科学の研究を目的とし、中国に必要な事項が研究対象であった。設置当初の研究部門は、理学部（物理学科、化学科、生物学科、地質学科）と医学部（病理学科・細菌学科・生薬学科）に分かれていた。なお、1945年、日本が配線すると同時に閉所となった。

（19）高橋基生は、第一次満蒙学術調査研究団参加当時、東京帝国大学理学部植物学科に在籍していた（東京帝国大学1933：486）。

参考文献

朝日新聞「砂丘に得たる貴重な人類資料　往昔の文化を忍ぶ」1933年10月27日付朝刊，16（６）.

上田常一　1963. 森為三先生の追憶. 朝鮮学報26：114-123.

小池一之　2007. 多田先生のフィールドノート. 駒澤大学大学院地理学研究35：１-16.

大場秀章　2007.『植物文化人物事典―江戸から近現代・植物に魅せられた人々―』日外アソシエーツ.

岡田俊裕　2013.『日本地理学人物事典　近代編２』原書房.

小倉謙　1940.『東京帝国大学理学部植物学教室沿革』東京帝国大学理学部植物学教室.

河田党　1968. 岸田久吉博士をいたむ. 日本応用動物昆虫学会誌12（３）：177-178.

小西健二　2009. 連載 日本古生物学界の生い立ち 第11回 日本で恐竜化石の発見される前. 福井県立恐竜博物館ニュースDinosaurs 27：４-６.

駒澤大学地理学会編　1978. 多田文男先生略歴および著作目録（多田文男先生喜寿記念）. 駒澤地理14：263-271.

小南不二男　1933. 常磐有煙炭の発熱量計算に就て. 石炭時報８（６）：10-15.

上海自然科学研究所　1942.『上海自然科学研究所十周年紀念誌』上海自然科学研究所.

人事興信所編　1941.『人事興信録　第13版 下』人事興信所.

第四高等学校　1915.『第四高等学校一覧・第十臨時教員養成所一覧. 自大正４至５年』第四高等学校.

多田文男　1937.『熱河ノ地理』第一次滿蒙學術調査研究團.

地質調査所　1919.『工業原料鉱物調査報告 第４号』地質調査所.

地質調査所百年史編集委員会編　1982.『地質調査所百年史』地質調査所創立100周年協賛会.

東京帝国大学　1895.『東京帝国大学一覧. 明治27-28年』東京帝国大学.

東京帝国大学　1897.『東京帝国大学一覧. 明治30-31年』東京帝国大学.

東京帝国大学　1904.『東京帝国大学一覧. 明治37-38年』東京帝国大学.

東京帝国大学　1907.『東京帝国大学一覧. 明治40-41年』東京帝国大学.

東京帝国大学　1911.『東京帝国大学一覧. 昭和43-44年度』東京帝国大学.

東京帝国大学　1921.『東京帝国大学一覧. 從大正９年 至大正10年』東京帝国大学.

東京帝国大学　1930.『東京帝国大学一覧. 昭和５年度』東京帝国大学.

東北帝国大学　1923.『東北帝国大学一覧. 自大正12至13年』東北帝国大学.

東北帝国大学　1925.『東北帝国大学一覧. 自大正14至15年』東北帝国大学.

東北帝国大学　1926.『東北帝国大学一覧. 自大正15至16年』東北帝国大学.

東北帝国大学　1929.『東北帝国大学一覧. 昭和４年４月至５年３月』東北帝国大学.

徳永重元　1985. 徳永重康小伝. 地学雑誌94（３）：194-196.

徳永重康　1934.『第一次滿蒙學術調査研究團ノ自然科學調査』第一次滿蒙學術調査研究團.

徳永重康;中井猛之進　1940.『結文／總目録／追記』第一次滿蒙學術調査研究團.

日本地学史編纂委員会　2001. 日本地学の展開（大正13年～昭和20年）その２：「日本地学史」稿抄. 地学雑誌 110（３）：362-392.

日本歴史学会編　1999.『日本史研究者辞典』吉川弘文館.

水谷進治郎　1990. 松澤勲先生を偲んで. 地質學雜誌 96（12）：1010.

山根幸夫　2005.『東方文化事業の歴史―昭和戦前期における日中文化交流―』汲古書院.

八幡一郎先生頌寿記念考古学論集編集委員会編　1985.『日本の黎明：八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版.

早稲田大学　1936.『早稲田大学一覧. 昭和12年』早稲田大学.

JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B05016054600（第）.『満蒙学術調査団調査事業助成関係一件（徳永重康関係）』（H-６-２-０-28）（外務省外交史料館）

表３　第一次満蒙学術調査研究団に関する多田文男フィールドノートの内容

資料番号	記入日	内容						備考
		1	2	3	4	5	6	
1430B25_001						○		表紙
1430B25_002	未記入						○	拾得物届先,「熱河行　第一冊」, 氏名
1430B25_003	未記入					○		
1430B25_004	未記入				○			「出発７月16日頃　船ハ神戸ヨリ19□□□/６月１日午後２時集会（木）/24頃□□/27日頃蒙古」
1430B25_005	未記入				○			内蒙古集落戸数（『東部内蒙古調査報告』(1914) より引用）
1430B25_006	未記入				○			同上
1430B25_007	未記入				○			同上
1430B25_008	未記入				○			持ち物
1430B25_009	未記入				○			同上
1430B25_010	未記入				○			大井芳雄氏住所
1430B25_011	未記入				○			「北上の海岸地形　大塚弥之助」
1430B25_012	未記入				○			西和田久学 1898. 欒河及熱河の族行談. 地学雑誌 10（４), 195-200. 小川琢治 1903. 内蒙古東部地勢井地質一斑. 地学雑誌 15(１), 28-41.
1430B25_013	８月１日 ～３日			○				８/１新京滞在, ８/２夜に新京発, ８/３奉天経由錦州着
1430B25_014	未記入		○					
1430B25_015	未記入		○					
1430B25_016	８月５日			○				８/５北票炭坑・鐵家営子・焼鍋・虎□営子
1430B25_017	未記入	○						北票市位置・面積・人口・産業等
1430B25_018	８月６日 ７日		○	○				８/６荷物整理 ８/７北票警務局・永順粮桟（取引所）・町屋
1430B25_019	８月８日 ９日	○	○	○				８/８朝陽・羅家構 ８/９朝陽警務局・蒙克章営子・王家杖子盆地・姜家窩棚・二旗営子
1430B25_020	未記入	○						朝陽県内集落の戸数
1430B25_021	未記入	○	○					同上
1430B25_022	未記入		○					集落形態図
1430B25_023	未記入	○	○					蒙克地地形及び家屋形態図
1430B25_024	未記入		○					姜家窩棚集落形態図
1430B25_025	８月10日	○	○	○				二旗営子･西黄地,　８/10八里舗･梢＜月古＞営子･老□溝,「比日往復三里」
1430B25_026	未記入						○	風景スケッチ
1430B25_027	８月11日	○	○	○				梢＜月古＞営子集落形態図,　８/11朝陽□事所, 憲兵隊
1430B25_028	未記入	○	○					朝陽県人口等, 朝陽県公署の見取り図
1430B25_029	８月11日 12日	○	○					８/11喇嘛廟・朝陽県公署・弁事所・憲兵隊 ８/12凌源・大馬廠・康家屯
1430B25_030	８月13日		○					家屋形態図
1430B25_031	未記入		○					八里堡家屋形態図
1430B25_032	未記入		○					同上
1430B25_033	未記入	○	○					八里堡記録, 十五里堡家屋形態図
1430B25_034	８月14日	○		○				８/14凌源県・沿革・気候・戸数等

1430B25_035	8月17日			○				8/17熱河離宮・満洲文化協会編「熱河事情」(1932) 閲覧
1430B25_036	8月18日	○	○	○				8/18獅子溝・乗之廟方面，獅子溝集落形態図
1430B25_037	未記入		○					獅子溝家屋形態・周辺地形の断面図
1430B25_038	8月19日	○	○	○				8/19伊犁廟（安遠廟），河東部落 河東部落集落形態・家屋形態図
1430B25_039	8月20日	○	○	○				8/20飛行機による古北口・五龍山方面の地形観察 二道河営子家屋形態図
1430B25_040	未記入		○					伊犁廟南側斜面の家屋形態図，五窰溝家屋形態図
1430B25_041	未記入	○	○					五窰溝家屋形態図，五窰溝周辺地形のスケッチ
1430B25_042	未記入	○						「承徳ノ一般情勢」(経済)
1430B25_043	未記入	○			○			「承徳ノ一般情勢」(教育・宗教)，承徳～五龍山の行程
1430B25_044	8月24日	○		○				8/24牛□子溝・捻毛溝・磚瓦窟
1430B25_045	8月25日		○	○				8/25紫河口，家屋形態図・山脈スケッチ
1430B25_046	未記入		○					中澇窪家屋形態図
1430B25_047	8月25日	○	○					紫河口・二道営子周辺地形断面図，二道営子家屋形態図
1430B25_048	未記入		○					二道営子家屋形態図
1430B25_049	8月27日	○		○				8/27北営房
1430B25_050	8月28日		○					地形断面図，家屋形態図
1430B25_051	未記入	○	○					北馬園子家屋形態図
1430B25_052	8月29日	○		○				興隆縣警備隊司令部での調査内容 8/28北営房から興隆縣へ移動中の地形観察
1430B25_053	未記入	○	○	○				(1430B25_52の続き) 北営房・金城子・鷹手営子等興隆縣内集落立地・農業等
1430B25_054	未記入	○						(1430B25_53の続き)
1430B25_055	8月30日	○						興隆縣政務所での聞き取った内容
1430B25_056	8月30日 31日		○	○				8/29「雨激シ」興隆縣司令部，夜，大隊長の招待 8/30興隆縣政務局・商務会・□業局，家屋形態図
1430B25_057	未記入	○	○					十四項家屋形態図
1430B25_058	未記入	○						水金溝に関する内容
1430B25_059	未記入	○	○					「謹□興隆縣商業種数及商品来源調査表」 「興隆縣附近一般情勢」
1430B25_060	9月2日	○	○					9/2興隆縣発，馬蘭関に向かう
1430B25_061	9月3日	○		○				9/3大倒流水
1430B25_062	未記入						○	興隆縣に黄土がない要因についての考察
1430B25_063	未記入						○	「詩人，登山家としてのヤング」
1430B25_064	未記入						○	満州国国歌
1430B25_065	未記入				○			18～22日にかけての予定か
1430B25_066	未記入				○			地形スケッチ等
1430B25_067	未記入						○	「熱河自信　小川，西和田，片山，其他地質学ノ人」
1430B25_068	未記入				○			
1430B25_069	未記入					○		
1430B25_070						○		裏表紙
1430B26_001						○		表紙
1430B26_002	未記入						○	拾得物届先，「熱河行　第二巻」，氏名
1430B26_003	未記入					○		

1430B26_004	未記入	○	○					大倒流水の金鉱に関する記録
1430B26_005	未記入	○						大倒流水の情勢
1430B26_006	9月5日	○		○				9/5万里長城（鮎奥石附近）
1430B26_007	未記入	○		○				万里長城に関する記録 9/4大倒流水金鉱，夜に歓待を受ける
1430B26_008	未記入	○	○					小営道山□，馬商川，三道河に関する記述 馬商川家屋形態図
1430B26_009	未記入	○	○					集落形態図
1430B26_010	9月7日	○		○				9/7大倒流水出発，南双洞子，興隆縣に向かう
1430B26_011	9月8日		○	○				9/8興隆縣滞在（司令部・弁事所），「興隆縣城ノ形」
1430B26_012	9月9日	○	○	○				9/9楊樹溝・三道河・墻子路，「アル一軒」図
1430B26_013	9月10日	○		○				三道河・墻子路に関する記述，9/10石匣鎮
1430B26_014	9月11日 12日			○				9/11古北口 9/12古北口・万里長城見学
1430B26_015	未記入	○						古北口の情勢（辨事所での調査内容）
1430B26_016	未記入	○		○				古北口周辺の農業，地形スケッチ
1430B26_017	9月13日 14日		○	○				9/13古北口附近の古戦場跡・遺跡見学（八幡氏同行），9/14承徳，馬圍子地形スケッチ
1430B26_018	9月17日	○						「灤平城戸数調査」
1430B26_019	未記入	○						灤平縣の情勢
1430B26_020	未記入	○		○				灤平縣の情勢（続き） 9/15満州国承認1周年記念の旗行列を承徳で見学 9/16満州国承認一周年記念祝賀会
1430B26_021	9月18日 19日	○		○				9/18（未記入） 9/19承徳縣警務局，警務局での調査内容
1430B26_022	9月20日	○		○				9/20喇嘛寺・承徳憲兵隊・熱河公署民政府で調査， 熱河都市・集落の面積・耕地面積等の統計
1430B26_023	未記入	○						熱河都市・集落の戸数・人口
1430B26_024	9月21日 22日			○				9/21荷造り，夜，特務機関長松室大佐の招待 9/22正午，領事館・省公署実業局主催の歓迎会，夜，司令部食堂にて西第八師団長の招宴
1430B26_025	9月23日 24日	○		○				9/23凌源へ移動，午後2時半着 9/24凌源発，建平着，凌源建平間の集落観察
1430B26_026	未記入	○	○					憲兵隊での聞き取り内容，建平・大道の景観観察
1430B26_027	9月25日	○	○	○				9/25建平発赤峰着，地形スケッチ，火焼地観察記録
1430B26_028	未記入	○	○					集落形態図
1430B26_029	未記入	○	○					集落形態図
1430B26_030	9月25日	○	○					赤峰附近地形観察，赤峰附近の街道スケッチ
1430B26_031	9月26日	○	○					赤峰附近地形スケッチ，赤峰平野と家屋形態
1430B26_032	9月27日	○		○				9/27赤峰発，烏丹城着，烏丹城での観察記録
1430B26_033	未記入	○	○					烏丹城盆地の地形・産業観察
1430B26_034	未記入	○	○					烏丹城盆地の地形・産業観察
1430B26_035	9月28日		○	○				9/28烏丹城出発□庚廟，四道張房，一□樹，沙爾木倫河，巴林橋 巴林橋等地形観察
1430B26_036	未記入	○	○					地形観察
1430B26_037	9月28日			○				林西街道，沙爾木倫河畔，烏丹城周辺の地形・交通・産業

1430B26_038	9月29日		○	○				9/29北店子，東翁牛特王府 北店子集落形態図，「オボ」スケッチ
1430B26_039	未記入	○	○					地形観察，フシ営子廃墟外観図
1430B26_040	未記入	○					○	フシ営子廃墟間取り図，景観スケッチ
1430B26_041	9月30日	○	○					オボ，貝子府に関する記述，東翁牛特王府周辺の景観観察， 9/30ボルデン湖，ボルデン湖附近の地形観察
1430B26_042	未記入	○	○					プトイ村集落形態図
1430B26_043	未記入		○					家屋形態図
1430B26_044	未記入	○	○					家屋形態図，「移動テント」スケッチ
1430B26_045	9月30日	○	○	○				翁牛特左旗子子営子の家屋形態図 9/30ボルデン湖畔，プトイ村 ボルデン湖・「第一峠」・プトイ村周辺の地形観察
1430B26_046	未記入	○						ボルデン湖盆地周辺の地形・土地利用・景観観察
1430B26_047	10月1日			○			○	東翁牛特貝子府の朝の様子，放牧の風景スケッチ
1430B26_048	10月1日	○	○					家屋形態図，旗竿廟・旗竿部落の産業
1430B26_049	10月1日	○	○	○			○	盆地スケッチ 10/1旗竿廟，旗竿部落，鮑壽山公爵を訪問 旗竿部落の産業についての調査記録，家屋形態図
1430B26_050	10月2日	○	○	○				10/2烏丹城盆地・山側台地の堆積物調査，パンプチーラ・五衛府東営子の集落・家屋形態調査，地質断面図
1430B26_051	未記入		○					烏丹城盆地断面図，家屋形態図
1430B26_052	未記入	○	○					五衛府東営子家屋形態図
1430B26_053	未記入		○					移動式包形態図
1430B26_054	未記入	○	○					移動式包外観図，翁牛特貝子府周辺台地の断面図
1430B26_055	未記入	○	○					地質断面図と観察内容
1430B26_056	10月3日	○		○				10/3烏丹城商務会・県弁事所で赤峰県沿革・地誌調査
1430B26_057	未記入	○						赤峰県の沿革・地誌（つづき）
1430B26_058	10月4日	○	○					烏丹城西方の地形観察
1430B26_059	10月4日	○	○	○				10/4烏丹城発赤峰着，途中に地形調査
1430B26_060	未記入	○						「囲場県誌」（位置，面積，人口，気候，産業等の概況）
1430B26_061	未記入	○						「囲場県誌」（産業）
1430B26_062	未記入	○						「囲場県誌」（沿革，住民，宗教，政治，地方誌）
1430B26_063	未記入	○						「囲場県誌」（地方誌，各区別戸数及人口，県街戸数）
1430B26_064	10月5日	○						赤峰警務局での調査内容，「赤峰県全境戸数概教左記」
1430B26_065	未記入	○						赤峰の情勢について，喀喇沁右旗の概況
1430B26_066	未記入		○					卓索図盟の戸数・人口・耕地等の統計
1430B26_067	未記入				○			モンゴル語の日本語訳のメモ（あいさつ等）
1430B26_068	未記入				○			金額のメモ
1430B26_069	未記入				○			
1430B26_070	未記入					○		
1430B26_071	未記入					○		裏表紙
1430B87_001	未記入						○	「熱河」
1430B87_002	未記入						○	拾得物届先，「熱河」，氏名
1430B87_003	未記入					○		
1430B87_004	未記入	○						漢人集落と蒙古人集落の形態の分類

1430B87_005	未記入	○						家屋形態の７分類，道路・交通機関の分類
1430B87_006	９月６日 10日	○	○	○				９/10（日付は記述のまま）赤峰市南・西・北方地域の地形・人文調査 ９/６（日付は記述のまま）赤峰発烏南ハタ付近調査
1430B87_007	未記入	○	○					「小水地」家屋形態図
1430B87_008	未記入		○					家屋形態図
1430B87_009	未記入		○					「三□子」集落形態図
1430B87_010	未記入	○	○					三□子・半穴居の調査記録
1430B87_011	10月７日	○		○				10/７三里堡・八里堡の集落形態，付近の文化景観観察，赤峰弁事所で県内産業
1430B87_012	未記入	○	○					八里堡・赤峰郊外集落形態図
1430B87_013	未記入	○						耕地割，農作物，植生についての記録
1430B87_014	10月８日 ９日			○				10/８西部王廟，花木蘭城 10/９赤峰発朝陽着，移動中に屋根の形態観察
1430B87_015	未記入	○	○					家屋形態図，耕作地の観察記録
1430B87_016	10月10日 ～18，20， 21，22日 10月26日			○	○			10/10～22調査終了から東京帰着までの行程 10/26「朝日講堂ニ於ケル講演会」（中井氏講演のメモ）
1430B87_017	未記入				○			本田氏講演のメモ，「農法」
1430B87_018	未記入				○			満蒙地域の地層群，徳永氏講演のメモ
1430B87_019	未記入				○			中井氏講演のメモ
1430B87_020	未記入		○					烏丹城北部地名図
1430B87_021	未記入	○	○					「熱河省ノ面積」
1430B87_022	未記入				○			「十二月十六日/熱河の地質　徳永重康」 「熱河最古の実測図」
1430B87_023	未記入		○					「薫営子Reliefenergie」「Siedlung dichte」，地名
1430B87_024	未記入						○	
1430B87_025	未記入						○	「聚落」に関する項目一覧
1430B87_026	未記入						○	「村」に関する項目一覧
1430B87_027	未記入				○			山崎氏の研究内容，松井氏の研究内容
1430B87_028	未記入				○			「文理大ノ人，不来/早くナ」
1430B87_029	未記入		○		○			「所持品」「大凌河地域」
1430B87_030	未記入				○			大凌河・凌河・老哈河と地形・植生等との関係性，「研究ノ対称」
1430B87_031	未記入				○			「地理ノ教室ノ話ガ非常ニ「ダラク」シタト思ヒマセンカ」
1430B87_032	未記入				○			本多氏住所，「地形図ノ読方/森ト□田ト何シラ□イカ」
1430B87_033	未記入				○			「人文地理」
1430B87_034	未記入				○			「自然景観」，右ページ欠
1430B87_035	未記入					○		
1430B87_036	未記入					○		裏表紙

１，調査記録（文）　２，調査記録（図表）　３，日記　４，メモ　５，未記入　６，その他